

**【旧約聖書日課】 イザヤ書 2章1～5節**

<sup>1</sup>アモツの子イザヤが、ユダとエルサレムについて幻に見たこと。

<sup>2</sup> 終わりの日に

主の神殿の山は、山々の頭として堅く立ち  
どの峰よりも高くそびえる。

国々はこぞって大河のようにそこに向かい

<sup>3</sup> 多くの民が来て言う。

「主の山に登り、ヤコブの神の家に行こう。

主はわたしたちに道を示される。

わたしたちはその道を歩もう」と。

主の教えはシオンから

御言葉はエルサレムから出る。

<sup>4</sup> 主は国々の争いを裁き、多くの民を戒められる。

彼らは剣を打ち直して鋤とし

槍を打ち直して鎌とする。

国は国に向かって剣を上げず

もはや戦うことを学ばない。

<sup>5</sup> ヤコブの家よ、主の光の中を歩もう。

**【使徒書日課】 ローマの信徒への手紙 13章8～14節**

<sup>8</sup>互いに愛し合うことのほかは、だれに対しても借りがあってはなりません。人を愛する者は、律法を全うしているのです。<sup>9</sup>「姦淫するな、殺すな、盗むな、むさぼるな」、そのほかどんな掟があっても、「隣人を自分のように愛しなさい」という言葉に要約されます。<sup>10</sup>愛は隣人に悪を行いません。だから、愛は律法を全うするものです。

<sup>11</sup>更に、あなたがたは今がどんな時であるかを知っています。あなたがたが眠りから覚めるべき時が既に来ています。今や、わたしたちが信仰に入ったころよりも、救いは近づいているからです。<sup>12</sup>夜は更け、日は近づいた。だから、闇の行いを脱ぎ捨てて光の武器を身に着けましょう。<sup>13</sup>日中を歩むように、品位をもって歩もうではありませんか。酒宴と酩酊、淫乱と好色、争いとねたみを捨て、<sup>14</sup>主イエス・キリストを身にまといなさい。欲望を満足させようとして、肉に心を用いてはなりません。

**【福音書日課】 マタイによる福音書 24章36～44節**

<sup>36</sup>「その日、その時は、だれも知らない。天使たちも子も知らない。ただ、父だけがご存じである。<sup>37</sup>人の子が来るのは、ノアの時と同じだからである。<sup>38</sup>洪水になる前は、ノアが箱舟に入るその日まで、人々は食べたり飲んだり、めとったり嫁いだりしていた。<sup>39</sup>そして、洪水が襲って来て一人残らずさらうまで、何も気がつかなかった。人の子が来る場合も、このようである。<sup>40</sup>そのとき、畑に二人の男がいれば、一人は連れて行かれ、もう一人は残される。<sup>41</sup>二人の女が臼をひいていれば、一人は連れて行かれ、もう一人は残される。<sup>42</sup>だから、目を覚ましていなさい。いつの日、自分の主が帰って来られるのか、あなたがたには分からないからである。<sup>43</sup>このことをわきまえていなさい。家の主人は、泥棒が夜のいつごろやって来るかを知っていたら、目を覚ましていて、みすみす自分の家に押し入らせはしないだろう。<sup>44</sup>だから、あなたがたも用意していなさい。人の子は思いがけない時に来るからである。」

先週は特別伝道礼拝に代わる初の試みとして、オープンチャーチを終えることができました。準備から当日のことまで、すべてが神さまの御手の中で守られたことを感謝いたします。たくさんの準備をいたしました。いざ当日になると様々な対応に追われたり、配慮の足りないことに気が付かされたこともありました。しかしながら、足りなかったと思えるそれほどに、多くの方々がおいでになりました。礼拝堂で前を見て座っている皆さんはお気づきにならなかったかもしれませんが、初めておいでになられた方から、皆さんが礼拝する後ろ姿はしっかりと見られ、賛美の歌声は一階でモニター礼拝をしている方々にも聞かれています。私は当日、教会に興味をもって入って下さった方をご案内しながら、教会のみなさんが神さまの前に一つに集められ、礼拝する姿が、ただその後姿が、石神井の地にあってキリスト者としての証しとなっているのだと思わされました。神さまがご支配する神の国がここにある。人の思いで左右されるような集まりではなくて、主がここにおられ、お一人お一人をこの会堂へ招き、この空間を主ご自身が治めておられる。黙示録にあるような天の礼拝がここでもなされていると感動を覚えました。そして初めて来られた方々をご案内しながら「最も小さい者の一人」に礼拝の席をさしだす者になりたいと、献身の思いを新たにされました。

私よりも皆さんの喜びの方が大きかったのではないのでしょうか？何十年ぶりという久しぶりの兄弟姉妹が幾人か、それもお家族を連れて教会へ帰ってきてくださいました。あの人は来ないだろう、そう思われていた方がいらした。とても懐かしい方々が、再び教会へと呼び集められたのです。私たち人の思いとは異なる神さまの思いが、御心のままになされた。主ご自身が、教会を離れていたお一人お一人に働きかけてくださったのだと感謝の思いで満たされました。

オープンチャーチとして開放した一日でしたが、先週は終末主日（収穫感謝日）としておささげした礼拝でもありました。秋の実りを聖壇に上げることはしませんでした。信仰の実りを豊かに実らせること、また、信仰の実りを分かち合うことを思わされた収穫感謝日だったことも主に感謝いたします。教会暦の最後の主日としてふさわしい終末主日だったといえるでしょう。

## 二つのアドベント

本日より教会の暦は新しい一年を迎えます。クリスマスを迎える前の四週間を教会では待降節・アドベントと呼んでいます。聖壇の掛布は、待降節に入り、今日から紫色に変わりました。紫色は教会では悔い改めを表す色ですから、クリスマスをむかえる前のこの四週間に、心をしずめ、自分を見つめなおし、また気づかなかったことや、忘れていた人を思い起こして、クリスマスを迎える心の準備

をします。アドベントは、「到来」を意味するラテン語から派生した言葉です。到来、来臨という意味です。クリスマスが到来するのです。御子イエスさまのお誕生をお祝いするクリスマスがやって来るのです。同時に、アドベントにはもう一つの意味があります。キリストの再臨、終わりの時にキリストが再び来られる、そのことを覚えて過ごす時です。御子のご降誕クリスマスを待ちつつ、終わりの時に再びキリストが来られることを覚えるのが、この四週間の待降節です。クリスマスに先立つ四週間を、主のご降誕の備えをしつつ、主の再び来たりたもうを待ち望むのです。

### **その日、その時は、だれも知らない**

「おっしゃってください。そのことはいつ起こるのですか。また、あなたが来られて、世の終わる時には、どんな徴があるのですか（24：3）」弟子たちの問いを受けて、イエスさまがお答えになります。「その日、その時は、だれも知らない。天使たちも子も知らない。ただ父だけがご存じである」。弟子たちがイエスさまにひそかに聞いたこれらのことについて、主イエスさまは、いくつもの徴を旧約聖書の預言を引用しながら終わりの日についてお語りになっています。多くの徴があらわれるのだから、あなたがたはその時だと悟りなさい。終わりの徴が現れるのを見たら、まもなく主が来られると悟りなさいと、かなり詳しくその様子をお話になります。

けれども、肝心の「いつ」については「その日、その時は誰も知らない」と短くお答えになるだけなのです。初代教会の時代からキリストの再臨については、いろいろなことが考えられていました。復活の後、すぐにでもキリストが再臨するのではないか、いやいや再臨はずっと先におこる、あるいは再臨なんておこらないという考えまでありました。しかし、パウロの手紙にもあるように、再臨は確かにある、しかし、それはいつなのかはわからない、だから、キリスト者としていつもしっかりとした生き方をしなさいというのが使徒たちの教えです。神の領域の事柄に、人間があれこれ口出しできることはありません。主のおいでになる時はいつなのか、それをご存じなのは天の父だけです。

だからこそ、いつキリストがおいでになってもいいように、目を覚ましていなければなりません。「人の子は思いがけない時に来るからである」。キリストの時は、神の定めた時です。私たち人間の思い通りではなく、神の自由なご意志によって到来するのです。神の定めた時の中心におられるのはキリストです。

## 愛は律法を全うする

ローマの信徒への手紙では「あなたがたが眠りから覚めるべき時が既に来ています」とあります。なぜなら、私たちは信仰を与えられ、すでにキリストのものとされているからです。これから来るべきことではありつつも、しかしすでに完成の時が始まっているのです。「夜は更け、日は近づいた」という言葉にあらわされているように、罪に支配されていた夜のような闇はもう終わりなのです。夜とは古い時であり、日とは新しい時です。新しい時、キリストの時がやってくるのです。キリストの照らす真の光が、罪の闇夜に差し込んでくる。キリストの光が朝日が昇るように確実に到来するのです。だから、古い時のままではなく、闇の行いを脱ぎ捨て、キリストの光を身にまとうのです。私たちはキリストの救いにあずかって、既に主を知っているのだから、イエス・キリストの教えに今一度、立ち返ります。争い憎みあうのではなく、イエスさまがなさったように隣人を愛すのです。

「互いに愛し合うことのほかは、誰に対しても借りがあってはなりません。貢でも税でも支払うものがあつたなら、それはきっちり返しなさい。借りがあつたならば、ごまかしたり踏み倒したりせず、ちゃんと返さなければなりません。それに対して、「互いに愛し合うこと」においては誰に対しても借りがあつても良いのだとパウロはいうのです。誰かに愛されたからと言って、愛のお返しができなくてもいい。もちろん愛し合うことが大切ではあるけれども、愛されたから、では愛してやろうという関係ではないのです。聖書の語る愛はギブ&テイクではありません。すべての借りはできるだけ返さなければならない、しかし、ただ一つ愛することだけは、借りがあつてもいいのです。なぜなら愛は律法を全うするからです。「姦淫するな、殺すな、盗むな、むさぼるな」という掟は十戒の後半、隣人に対する律法です。隣人を愛することは、これらの掟を満たします。どれか一つが足りない、守れないということはなく、どんな律法をも満たしてしまうのが、隣人愛の教えなのです。「愛は隣人に悪を行いません。だから、愛は律法を全うするのです」。

私たちは、この待降節の初めの週、払いきれないような闇の状況に置かれているとしても、待たなしに差し込んでくるキリストの光に照らされていることを思い出します。主の光を目指し、主の光に導かれながら、そして主の光の中を歩むのです。紫色のアドベントの期節は、悔い改めの時です。忘れていた大切なことを思い出す時であり、忘れ去っていた大切な人を再び教会に呼び戻す時でもあります。キリストの示した愛に押し出され、そしてキリストの照らしてくださる光に向かって、クリスマスまでの備えの時を共に過ごしたいと願います。